定期演奏会ライブCD好評発売中！

「レコード芸術」「音楽現代」に取り上げられた注目のCD！

ドヴォルザーク

交響曲第9番ホ短調「新世界より」
序曲「謝肉祭」他

巨匠バティス
初来日の一期一会の貴重な録音

エンリケ・バティス　指揮

ベートーヴェン

交響曲第5番ハ短調「運命」
交響曲第6番ヘ長調「田園」

新ブライトコップ版による
世界初演・世界初録音の「運命」と「田園」

内藤　彰　指揮

会場にて販売中！

通常1枚 2,625円 のところ
会場販売価格

2,300 円

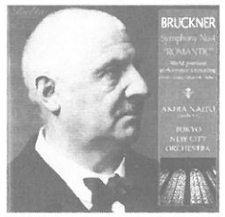
２枚セット　4,500円
３枚セット　6,700円
４枚セット　8,900円
にて販売いたします。

ブルックナー

交響曲第8番ハ短調

ブルックナー自信による改作稿
「アダージョ2」の世界初演盤！

内藤　彰　指揮



ブルックナー

交響曲第4番変ホ長調
「ロマンティック」

国際ブルックナー協会発行第3稿
コースヴェット版の世界初演・世界初録音

内藤　彰　指揮

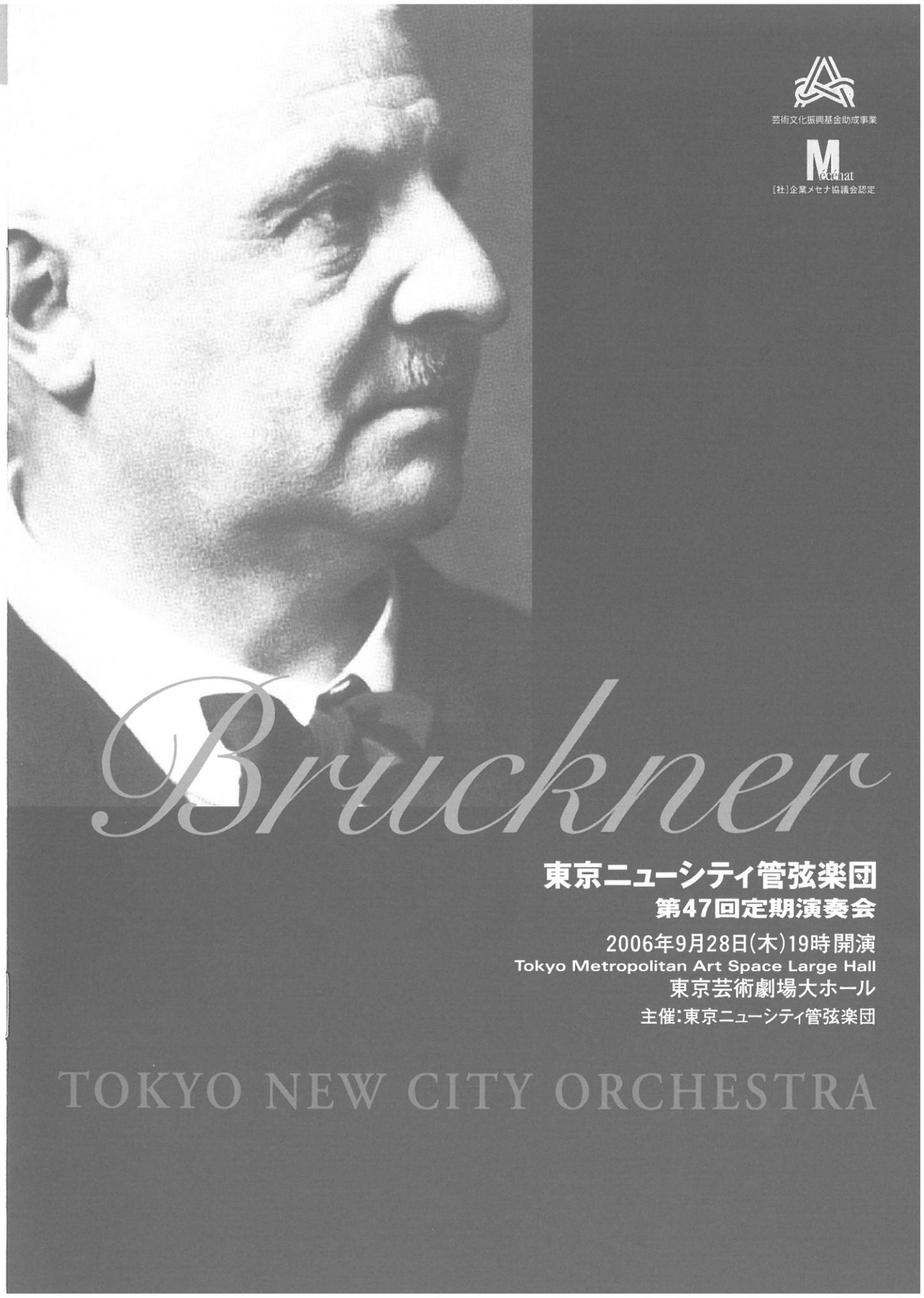
チャイコフスキー

交響曲第6番ロ短調「悲愴」
幻想序曲「ロメオとジュリエット」

魂を揺さぶった「悲愴」が
遂にCD化！

曽我　大介　指揮

INTERNATIONAL MUSIC SERVICE
ims
音楽会のサポーター
より良いコンサートのために……。
アイ・エム・エス　●楽器リース ●保管 ●移動 ●ステージ・スタッフ派遣
〒167-0043　東京都杉並区上荻2-3-4　ゆうでんビル1F　PHONE.03-3397-2292 FAX.03-3397-7728
URL http://www.jade.dti.ne.jp/~ims　E-mail ims-mail@ims-tokyo.co.jp



芸術文化振興基金助成事業

Mecenat
[社]企業メセナ協議会認定

Bruckner

東京ニューシティ管弦楽団
第47回定期演奏会

2006年9月28日(木)19時開演
Tokyo Metropolitan Art Space Large Hall
東京芸術劇場大ホール
主催:東京ニューシティ管弦楽団

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

死を賭した音楽

ブルックナー新稿の世界初演シリーズ

〈第47回定期演奏会〉

2006年・年間統一テーマ“愛と死”

Message

校訂者・ウィリアム・キャラガン氏からのメッセージ

本日演奏される第9番のフィナーレの完成版は、今夜の演奏のために最近改訂されたものです。
現在では717小節の長さになっており、30年にわたる学究と最新の研究成果を反映しています。
この中ではブルックナーの他の交響曲と同様に、この4楽章も曲の終わりが近づくにつれ、
前の3つの楽章に現れる主題の要素が頻度を増して使われています。
そしてコーダの終わりの部分に、アダージョの悲劇的主題が崇高なコラールと
ユニゾンの主題を背景にして、きらめくような新しい光の中に現れてくるのです。

The completion of the finale of the Ninth which is being presented tonight
has been recently revised for this performance, and is now 717 measures long.
It embodies the results of the most recent research,
as well as thirty years of Bruckner scholarship.
In it certain details parallel to the first movement have emerged,
as in some of the other symphonies. The themes of the previous movements recur
with gathering frequency as the end is neared, and in the peroration of the coda
the tragic theme of the adagio is presented in a brilliant new light against
the backdrop of the great chorale and the unison theme.

ウィリアム・キャラガン　William Carragan

ブルックナーの校訂者。ブルックナーの全交響曲の校訂者であったノーヴァク氏の要請により、最近第2番の新稿をブルックナー協会から出版した他、第1番、第5番にも携わり、1983年には第9番をいったん完成させた。ブルックナーの作品の演奏についての時経的な研究書の他、大学の物理学のテキストの著者、ギリシャ正教の音楽の編集者、さらにハープシコードの音楽の演奏家および編集者としても活動。

Program

リヒャルト・ワーグナー　Richard Wagner（1813〜1883）

「トリスタンとイゾルデ」より 前奏曲と“愛の死”〔'16〕

Prelude and Death of Isolde's Love from “Tristan and Isolde”

intermission〔'15〕

アントン・ブルックナー　Anton Bruckner（1824〜1896）

交響曲第9番 ニ短調 第4楽章完成版〔'85〕

Symphony No.9 in D minor —The 4th movement completed edition—

第1—3楽章：コールズ版2000年　※第2楽章トリオ部分は第2稿《キャラガン校訂》を使用
第4楽章：キャラガン版1983年／2006年9月補完 初演

the 1st-3rd movements : Benjamin Gunnar Cohrs completion 2000
*Trio of the 2nd movement : No.2 Trio revised by William Carragan
the 4th movement : William Carragan 1983 edition / revised 2006

第1楽章　Feierlich, misterioso
第2楽章　Scherzo : Bewegt;lebhaft -Trio:Sehr langsam- Scherzo da capo.
第3楽章　Adagio : Langsam;feierlich
第4楽章　Finale : Allegro moderato

指揮：内藤 彰 Conductor : Akira Naito
ソプラノ：蔵野 蘭子 Soprano : Ranko Kurano

死を音楽で如何に表すか：ブルックナーの場合

川崎 高伸

シリーズのテーマが《愛と死》であり、ブルックナーの「第九交響曲」は《死》という人間最大の問題に挑戦した作品であるため、この作品が今回取り上げられたのだが、この交響曲からは、厳粛で荘重な、あるいは人間離れした響きが伝わってくるものの、直接何らかの死の状態を描写したものでも、哲学的にあるいは観念的に死を表出したものでもない。ブルックナーが哲学者でも劇作家でもなく、純然たる音の職人としての作曲家だからである。では、彼はどうやって《死》を表現しようとしたのか?

ブルックナーは、リズム単位という一種の符牒を用いた。それ自体単独では何の意味も持たな素材（建物で言えば煉瓦のような）に特定の意味づけをすることによって、それは成し遂げられたのである。彼の最後の3曲の交響曲は『死の三部作』とも言われるが、各曲に共通して用いられているリズムが、タタタンという一種の符牒としての《死のリズム》である。どのようにして、このリズム形に《死》の意味合いが付加され得たのかというと、直接的にはヴァーグナーの死に直面したときに加えられた「第七交響曲」アダージョのコーダの葬送音楽に使われたことに発する。もちろんこの意味付けの背後には、ベートーヴェンの「第9交響曲」アダージョの終わりの方で意味ありげに吹奏されるトランペットのファンファーレや「テ・デウム」の『永遠に惑わず』という素地があっての話だが・・・・

さて3曲の中で、このタタタンの《死のリズム》がもっとも効果的に、また意味深く作られているのが「第九交響曲」である。第1楽章では、第3主題群においてこのリズムは主題中に埋め込まれて頻発しているが、提示部最後の非常にのどかな部分において、ホルンとヴァイオリンによって、ひそやかではあるが意味深く顕現する。コーダの盛り上りの中で突如響き渡るトランペットの《死のリズム》は圧巻である。続くスケルツォでは、俄然この《死のリズム》は冒頭から主役として活躍する。『宇宙の鳴動』などと評されることもあるこの楽章は、リズムだけでいえば、まさに『死の刻印に満ちた舞踏』なのである。

アダージョ、《死のリズム》は、さらに明瞭な意味を持つ。最初の主題提示が終わったあとの大きな盛り上がりの頂点で、トランペットによって決定的な『死の宣告』がなされる。その直後、ブルックナーが『生への別れ』と命名したヴァーグナーテューバのコラール風合奏が、弦楽器の《死のリズム》によって縁取られるのも非常に印象的である。最後の場面で「第七交響曲」の主要動機が回想されることは、多くの解説書で触れられているが、この動機の前に《死のリズム》がくっ付いていることについては誰も気づかない。そう、これは《死のリズム》が追加された回想なのである。更に、このホルンの最後の動機は、直前の節目ごとに3度もフルートの高音によってメロディーラインは変えられて予兆の様に印象的に演奏される。このことには、ある種の宗教的な意味付けを感ぜざるを得ない。

【トリオ2とフィナーレ】

ブルックナーは、スケルツォのトリオを二度新たに作り直した。最初のものはヘ長調の全くスケッチ状態のトリオ1、2つ目はヴィオラのソロの付いた嬰ヘ長調のトリオ2、そして最後に現在演奏されている至高のトリオ3。トリオ3は、1894年初頭、アダージョが作曲される直前に突然現れたもので、それまではトリオ2がスケルツォに付いていた。この曲は短いがブルックナー晩年の様式で作られた佳曲であり、本来もっと演奏されるべきだが、現行のトリオ3があまりに素晴らしいため全く顧みられないのは非常に残念なことである。自筆譜にはテンポの指示はないが、今日演奏されるのはキャラガンが編集したゆっくりしたテンポによるものである。ここには既に、トリオ3のB主題がフルートによって吹かれているとともに、鐘を模したようなソードーレードシという固執動機が、ちょうどアダージョの最後の場面のヴァイオリンのソードーレーソーという動機を思わせるように何度も鳴り響く。

さて、お目当てのフィナーレ、この楽章は未完成な状態で残されたにもかかわらず、膨大な自筆原稿が現存し、全集版では、確認できる全原稿のフォトコピーが出版されている。それによると、バラバラの自筆譜に付せられた整理番号（ボーゲン番号）から、かなりの部分が散逸してしまったと考えられるとともに、一方では複数の原稿が存在する箇所もあり、ブルックナーが推敲を重ねていった様子も見て取れる。また、現存する各ボーゲンは、外見上ほぼ完成している部分やほとんど空白に近い部分などさまざまな状態である。ここには「テ・デウム」のリズムが導入されているが、《死のリズム》は全くと言ってよいほど現れない。ブルックナー最晩年の円熟した作曲技法を駆使した高度な音楽が、未整理の状態で繰り広げられるのである。

今日は、この困難な原資料の状態に対して、ブルックナーへの熱意と愛情が楽譜の端々から伝わる1983年に作られたキャラガン版の大幅改訂増補ヴァージョンが世界初演として演奏される。今回の改訂では、展開部のフーガと再現部後半からコーダにかけてを中心に手が加えられているが、音楽的にもっとも変化している部分は、再現部第3主題にあたるコラールを短縮し、原譜ボーゲン32（と考えられているもの）を生かした別の音楽に変えられたことである。

ブルックナー交響曲第九番の4楽章完成版演奏にあたって

東京ニューシティ管弦楽団　音楽監督　内藤　彰

ブルックナーの最高傑作の一つであるこの交響曲は、3楽章完成後、愛する神に捧げる（敬虔なカトリック信者）ため、病魔と闘いながら最終4楽章に2年以上を費やしましたが、必死の思いは通じず、とうとう残りわずかなところまで出来上がっていたにもかかわらず未完に終わってしまいました。

1楽章を書き始める時から4楽章までで一つという大きな設計図を描き、それぞれの楽章の関連性と、彼の作曲した他の曲のテーマをも取り入れたブルックナーの集大成としての壮大な計画は、全4楽章が全て演奏されて初めて実現されます。

それにもかかわらず、最近までは'未完であること'と、'3楽章までででも十分素晴らしい'こと等から、ブルックナーの本来の意思とは全く無関係な理由で、'3楽章までの交響曲'が常識になっていました。

しかも具合の悪いことに、せっかく終わりの部分（コーダ部分）を除く多くが作曲されていたにもかかわらず、死後各Bogen（ブルックナーは二つ折りにされた五線紙の表裏に作曲していました。この一枚のことをBogenと呼び、その一枚4ページ分が作曲上の一つの単位となっています）のかなりが散逸してしまい、あるBogenは図書館に、あるいは遺品として関係者の個人へと渡ってしまいました。4楽章の存在は、1934年に公にされ、以来それらの資料を基に幾度となく復元の試みがなされて来ました。

近代としては、本日の補完・校訂者キャラガン氏が1983年に未作曲のコーダ部分の大半と、自筆譜が散逸して行方不明になっている部分、或いは大切な単旋律や、バス部分だけが書かれ、他がまだ書かれていない箇所、等を研究し、ブルックナーの書法に沿って補完した4楽章完成版が発表されました。

その後、他の研究者達が競って研究や、散在していたBogenの発見に努め、1986年にサマーレ&マッツーカ版が、さらにフィリップ氏とコールズ氏が加わり、1992年版、1996年版が出来、最近ではコールズ氏の2004年版が演奏されたそうです。

これに対し、その後キャラガン氏の第2版もCD化され、本日の演奏は、私たちの演奏会に間に合わせて今月初旬出来上が上がったばかりの第3版の初演となります。今回の版には新たに発見されたBogenが加わり、科学の力も借りた研究の結果、著しい進歩の跡が見えます。

どの新版も、その後さらに改良され出版される新版から見れば不完全な箇所があることは否めません。しかし、その版とそれを使った演奏があってこそ初めて次の進歩が生まれて来ます。ひょっとしたら今後さらに新しいBogenが見つかる等、本日の版より一歩も二歩も改良された版がお目見えするかもしれません。

ともあれ今日現在としては、ブルックナーの意思を一番汲んでいるであろう「ブックナー交響曲第九番（4楽章完成版）」を校訂者と協力し合って皆さんにお聴かせできることは、私たちにとって最高の喜びであると共に、本日の私どもの公演が、限りなくブルックナーの意思に沿った「ブルックナー交響曲第九番」完成への一助となることを信じ、大変光栄なことだと思っております。

私どもは、すでにブルックナーの交響曲第八番と第四番の新しい版の世界初演を皆様に聴いていただきました。これはおかげさまでイギリスにありますブルックナージャーナル誌を通じ、世界中から注目を浴び、そのCDに対しても思いがけなく絶賛の言葉を頂きました。今回の公演につきましても世界の各所からメールを頂き、ブルックナージャーナル誌からは、大きく記事として取り扱いたいとの積極的アプローチを頂いております。

私たちは来年、このような皆様方からの暖かい支えの下、キャラガン氏と共に皆様がまだお聴きになったことのない、第三番の新しい稿（中間稿）を世界初演することを考えております。

今までこのような協力者がいなかったがため日の目を見なかった名曲を世に紹介していく私たちの取り組みが、長い目で見て音楽史上からも意義ある活動となるよう、演奏面はもちろん、そこにいたるまでの校訂者との数々のやり取りや、関連の方々との出会いを、これからも私たちは大切にしていきたいと思っております。

本日は年間統一テーマ「愛と死」に相応しい2曲が採り上げられる。前半はワーグナー「トリスタンとイゾルデ」から、前奏曲と「愛の死」！ そして後半は恒例、ブルックナー新稿世界初演シリーズの第3弾として、8番「アダージョ2」、4番「コースヴェット版」に続き、今回はいよいよブルックナーが愛すべき神に捧げ、後世に託した未完の大作、交響曲第9番ニ短調の4楽章完成版が演奏される。

この秋、映画も公開される「トリスタン～」が決して成就されぬ悲恋を描いた作ならば、ブルックナーの方も、最初の三つの楽章を書き上げた後に残された2年間、彼はフィナーレの完成に没頭したが、宿願は遂に成就されなかったのである。交響曲とは一般にソナタ形式で書かれた楽章を含む三つないし四つの楽章からなる管弦楽曲であり、クラシック音楽を代表する最高の曲種とされているが、起承転結のはっきりした4楽章制こそ究極の形式であろう。ブルックナーが生涯、目標とし続けた理想である「幻の大交響曲」ももちろん4楽章制となった筈であり、それは当然「第9」の完成形態と一致する。そしてブルックナーの悪戦苦闘の努力の跡を物語るかのように膨大な量のスケッチと書きかけのスコアが遺されており、以前はアイネムの「ブルックナー・ディアローク」（ブルックナーとの対話）で一部を聴けるくらいだったものが、最近では補筆完成により演奏可能なフィナーレが何種類か作られCD化もされている。今回は最初に世に出たものの比較的耳にする機会の少ない、アメリカ在住の物理学者で気鋭のブルックナー学者キャラガン氏が作成したヴァージョンの最新改訂版を世界初演するが、さらにスケルツォのトリオについてもほとんど演奏機会のない「トリオ2」が使用される。

ワーグナー「トリスタンとイゾルデ」前奏曲と「愛の死」

総合芸術である「楽劇」の創始者ワーグナーは自分ではこの作品を楽劇とは呼んでいないが一応その範疇に入る作品と考えて良いだろう。前奏曲の冒頭、チェロによって奏される動機に重ねられる和音が有名なトリスタン和音で、その希薄な調性感は永遠の憧れを表現するかのようであり、トリスタンとイゾルデの決して成就されぬ恋を象徴するように、いつまでも解決されぬ和声は20世紀の無調音楽の先駆けとなったものである。「愛の死」はこの長大な作品の最後のクライマックスに当たる曲で、トリスタンの亡骸を前にしたイゾルデが自らの意志の力で愛の死を遂げる。オーケストラだけで奏されることも多いが、今回は日本を代表するワーグナー歌手である蔵野蘭子のソプラノ独唱付きの演奏。

ブルックナー／交響曲第9番ニ短調

ブルックナーの交響曲は「第8」まではまだ求道心の展開とでもいうようなドラマ性が残っているが「第9」だけは違う。神から贈り（送り）届けられた「悩み」を受け取り、神と共に悩んだブルックナーの一生のようにただ絶望と法悦が繰り返されるのみとなる。それ自体で形が整い完結してしまっている「第8」の方が一般受けするのは当然だが、永遠の進行（信仰）途上人間ブルックナーの真の代表作としては「第九」の方がより相応しいだろう。

〔第1楽章〕

典型的なブルックナー開始による原始霧。響あれ！ この曲はまず「存在する事」から始まる。この楽章はソナタ形式によるブルックナー交響曲の全両端楽章中でも数少ないベートーヴェン「第9」第1楽章と文字通り同工異曲の超人的な第一主題提示を持っているが、星雲状態から次第に部分動機が盛り上がり、遂に巨大な落下する主題となるこの型は「第3」第1楽章と「第4」のフィナーレだけで「第8」の両端楽章はこの型を採っていない。ということはブルックナー自身は「第8」を自らの最後の「幻の大交響曲」とは見ていなかったということになるのだが。そして第1主題の再現の問題。兎角「第3」「第4」のフィナーレ（「第5」シャルク版は第3主題が第1主題の役割を果たしている）に於ける弟子たちによるカットばかりが形式破壊と非難されるが、鶏が先か卵が先か、ブルックナー自身も展開部と再現部を融合する方向に進んで行ったのである。第二主題が出る直前の第1主題由来の三連音を含む両ヴァイオリンのカノンは聴くたびに「泣いている者は幸福なり、やがて……」という文句を連想してしまう。コーダは「第8」と違い一応フォルティッシシモで終わるが、激烈な転調後、終結は異例な空虚5度となる。

〔スケルツォ：第2楽章〕

前楽章の空虚5度に続く、トリスタン和音使用による浮遊感が印象的だが、そのまま大宇宙を震撼させるような激烈な音楽となる。トリオ3を使った完成形はベートーヴェン「第9」同様、ユニークな緩・急・緩のスケルツォとなったが、今回のトリオ2は著しく遅い。

〔アダージョ：第3楽章〕

冒頭、苦悩に満ちたヴァイオリンだけの1小節半。低弦が入った瞬間ブルックナーの世界が始まる。禁断の九度で始まるこの楽章は果たして何を表わしているのだろうか。神を探し求めようとした凡庸な宗教音楽家と違い、神を待ち望んだだけのブルックナー。だが迷いは一向になくならない。いや却って深まって行き、ただ悠々と絶望と法悦が繰り返されるのである。この楽章がシューベルトの「未完成」の第2楽章同様、ホ長調なのはただの偶然だろうか（トリスタン全曲が理念的ホ長調に基づくという説は偶然だろうが）。この楽章のコーダがブルックナーのアダージョとしては異例なほど入念に書かれているのも、或いは万一のことに備え完成は神の御手に委せたのかもしれない。全ては神の御前で成就するのである。

〔フィナーレ：第4楽章〕

ブルックナーの交響曲群にはベートーヴェンほどの多様性はないが、たった一つの幻の理想の大交響曲を追い求め作曲し続けるうちに遂に志半ばにして挫折してしまったのである。未完のこの楽章を見ると第1楽章同様、正しくベートーヴェン「第9」をモデルにした巨大な落下する第一主題が設定されているが、ブルックナーの完成されたフィナーレでこの型の第一主題を持つのは「第4」だけであり、当然その終楽章こそブルックナーの理想のフィナーレの雛形であると思われる。「第9」の終楽章完成版を作るなら「第4」を参考にすべきだろう。昨今「トゥーランドット」はリューの『愛の死?』で終わる演出も多いが、なければ欲しくなり、あればカットしたくなるのが天の邪鬼な人間心理というものであろう。そういえば最初から「完成版」で演奏されて来たモーツァルト「レクイエム」もジュスマイヤーの補筆部分が蔑ろにされがちなのである。このフィナーレは前述のように「第4」の終楽章、それも1稿の未整理な所により近いが、第1主題自体は「第8」の終楽章第1主題再現後の経過句にも似ている。そして冒頭の音型は初期作品である「第1」の出だしを連想するが、ヘ短調交響曲冒頭の音型もふんだんに出て来るのは誠に面白い現象である。以前聴いたキャラガン旧版でも第2主題再現直前のクライマックスに於ける金管のシンコペーション付加や、第3主題再現直前の高潮の第1主題提示部分の流用などなかなか聴き応えがしたが、今回の新版ではどう改善されているだろうか。

今年創立16年を迎える東京ニューシティ管弦楽団は、
この四月、なおいっそうの飛躍を願って、
「有限責任中間法人」に衣替えをいたしました。
これを機にサポーターズクラブ（賛助会員・定期会員制度）を発足させ、
ひとりでも多くの方々にオーケストラの魅力をお伝えすべく、
理事・評議員そして楽員、スタッフ一同、努力してまいります。
皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

東京ニューシティ管弦楽団理事会名簿

理 事 長：三善　清達（評論家、元東京音楽大学学長）
専務理事：内藤　彰（東京ニューシティ管弦楽団代表）
常務理事：杉山　繁三（東京ニューシティ管弦楽団営業顧問）
理　　事：家永　勝（日本音楽プロデューサー協会代表幹事）
石田　一志（評論家）
岡村　喬生（オペラ歌手）
竹腰　里子（北区合唱連盟理事長）
佐藤　幹一（東京学芸大学名誉教授）
田中　千香士（東京芸術大学名誉教授）
新実　徳英（作曲家）
松村　禎三（作曲家）
作田　忠司（東京ニューシティ管弦楽団事務局長）

評 議 員：神田　正美
（音楽プロデューサー・東京ニューシティ管弦楽団顧問）
斉藤　明（オズミュージック代表取締役）
丸岡　努（フレンドシップ・コンサート・ジャパン代表）
〈五十音順・敬称略〉

特別会員 御芳名

石本　務 様
木村　好次 様
小池　常隆 様
小出　三郎 様
冨野　光太郎 様
内藤　郁雄 様
渡辺　大雄 様
〈五十音順〉

御協賛企業

アクアサービス株式会社

東京ニューシティ管弦楽団サポーターズクラブ（賛助会員・定期会員制度）

■プラチナ会員（賛助会員）　年会費　1口10万円　定期演奏会のプラチナ席に毎回2名様ご招待
■ゴールド会員（賛助会員）　年会費　1口5万円　定期演奏会のプラチナ席に毎回1名様ご招待
■定期会員　年会費（5公演）S会員：19,500円・A会員：15,000円・B会員：10,500円

●友の会（入会金・年会費無料）
☆東京ニューシティ管弦楽団の演奏会のご案内・CDの割引案内等をお送りさせていただきます。
友の会会員の方には全公演のチケット（学生券を除く）を10%引きにて販売いたします。

2007年度定期演奏会プログラムまもなく発表。 http://tnco.or.jp

東京ニューシティ管弦楽団　TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

●音楽監督・常任指揮者
内藤　彰

●首席指揮者
曽我　大介

●コンサートマスター
鈴木　順子

■事務局
●事務局長
作田　忠司
●事務局次長
渡辺　晶子
●営業顧問
杉山　繁三
●スタッフ
青木　勝弘
木村　有美子
高松　順子
高松　正典
古屋　修
堀口　佐知子
松本　敬子
山本　ふさこ
●ライブラリアン
古市　尚子

●Members

Concertmaster
鈴木　順子

1st Violins
○中澤　真理子
中村　朱見
中川　さと子
徳井　えま
大竹　奏
小澤　郁子
渡辺　田鶴野
笹井　飛鳥
妙見　麻紀子
剣持　由紀子
伊東　佑樹
小島　光敬
岸田　晶子

2nd Violins
○富山　ゆりえ
山江　洋子
岡田　邦子
高階　久美子
荒巻　泉
栗原　りか
齋田　眞紀
出口　順子
寺田　久美子
老田　美郁
小池　真理
有村　実保子

Violas
○桜井　多美子
竹鼻　江美子
安達　いづみ
堀江　冬子
久郷　寿実子
出口　貴子
光行　澄子
松田　美奈子
森山　千春
戸谷　智子

Violoncellos
○齋藤　章一（＊）
大島　純
星野　敦
久保　公人
船田　裕子
岡田　裕人
望月　直哉
松　穣
冨成　倫子
松谷　明日香

Contrabasses
○徳高　宏行（＊）
青山　幸成
若林　昭
渡辺　章成
大黒屋　宏昌
飯田　克哲
石川　仁

Flutes
○井ノ上　洋（＊）
岩佐　和弘
丸田　悠太

Oboes
○徳田　振作（＊）
井上　恵子
齋藤　潔

Clarinets
○西尾　郁子（＊）
菊地　秀夫
鈴木　生子

Bassoons
○藤田　旬（＊）
伊藤　真由美
森田　信子

Horns
○小川　正毅（＊）
上久保 奈津子
松浦　光男
松田　俊太郎
源　真理

Wagner Tubas
小笠原　一弘
村本　岳史
曽根　敦子
木村　淳

Trumpets
○中西　清一（＊）
依田　泰幸
小野　美海
後藤　慎介

Trombones
○大川　真紀夫（＊）
伊藤　吉隆
恵藤　康充

Tuba
松下　晃一

Timpani
○藤城　佳之（＊）

Harp
平島　さより

Stage Manager
青木　勝弘

○印は首席奏者
＊印はインスペクター
＊Violln インスペクター　山川　奈緒子

東京ニューシティ管弦楽団 2006・2007年定期演奏会

12/6（水）19:00 東京芸術劇場 ■第48回定期演奏会
「クララへの愛」（シューマン没後150年記念）
・ブラームス：交響曲第1番終楽章
・シューマン：ピアノ協奏曲　イ短調
・シューマン：交響曲第4番
（マーラーオーケストレーション版）
■指揮：曽我 大介　ピアノ：三浦 友理枝
S:¥6,000　A:¥4,500　B:¥3,000　学生席：¥1,500

三浦 友理枝

2007年 1/14（日）14:30 北とぴあ さくらホール ■第49回定期演奏会
「愛の花咲く街、ウィーン」
・J.シュトラウス名曲選：春の声、ウィーンの森の物語、皇帝円舞曲、他
・J.シュトラウス：喜歌劇「こうもり」より
・レハール：喜歌劇「メリー・ウィドウ」より 他
■指揮：内藤 彰　チター：内藤 敏子　ソプラノ：高橋 知子　テノール：高橋 淳
S:¥5,000　A:¥4,000　B:¥3,000　学生席：¥1,500

■お問い合わせ・お申し込み：有限責任中間法人東京ニューシティ管弦楽団 **Tel:03-5933-3222**
〒178-0063 東京都練馬区東大泉3-22-15 シンフォニー・プラザ2F
Fax:03-6766-3782　E-mail:info@tnco.or.jp　http://tnco.or.jp
●やむを得ぬ事情により、出演者、曲目等が変更になる場合がございます。ご了承ください。